

政教社の国粹主義 (上)

荻原 隆

目 次

- 序論—日本の保守主義の貧弱—
 - 一 政教社の設立趣旨
 - 二 今外三郎
 - 三 加賀秀一
 - 四 三宅雪嶺 (以上本号)
- (次号で菊池熊太郎・杉浦重剛・井上円了などを取り扱う予定)

序論—日本の保守主義の貧弱—

政教社がいつ結成されたかは必ずしも判然としないが、明治二一(1888)年二月前後のころのようである。それに先立つ明治二〇(1887)年五月ごろから、哲学館設立グループの中で『日本人』の発行計画が持ち上がっていた。同人の棚橋一郎の回顧によれば、こんな会話でおおいに盛りあがったと言う¹⁾。

「あれは哲学書院が出来て居つて、哲学書院の二階へ吾々が寄つた事がある。確か辰巳君に三宅君に私に加賀秀一君、これだけ寄つて「どうも斯う外国かぶれが盛んになって来ちや仕様がないが、何とかこいつを叩き直さなくちやどうもならぬじやないか」と云ふことを、確か僕が言ひ出したと思つて居ります。さうすると「ウムそれは全くそうだ」(中略)又丁度吾々の手で雑誌「日本人」をやるあの前あたりは、議論を見ても何を見ても、相当ひどい外国かぶれであつた。それで偶然そんな話が出たんです。出ると皆無論賛成だ。誰だつたか雑誌でも一つ出そうじゃないかといふ話、それはよかろう、皆な賛成。」²⁾

やがて政教社・『日本人』に結集する人々は、棚橋が得意げに語っているように、彼の「外国かぶれ」を「叩き直そう」という提案にそうだそうだどと気炎を上げて意気投合したようである。しかし、「外国かぶれ」に本当の意味で対抗するのは彼らが当初思っていたようには安直でも手軽でもない。同調するにせよ、この場合のように反発するにせよ、相当の思想的準備・理論的用意が必要になってくる。

明治の日本は近代西洋文明にどう立ち向かうかというむずかしい課題に否応なく直面したわけであるが、一般に先行するすぐれた文明に本質的な意味で(イデオロギーとしてではなく本来の思想的意味で)対応し、大きな成果を収めようとする方法は二つある。

第一は先行する文明をとりあえず受容し、たとえ最初は模倣であっても、次第にその内容を充

実させ、やがてはそれを乗り越えるほどの高い普遍性を作り出し、世界に送り返すというやり方である。高度な文明にも大きな欠点や不十分なところは当然多々あり、近代西洋文明も例外ではないから、たとえ全的に乗り越えることはできなくても、その欠点や弱点を正し、あるいは新たな普遍性を付加することができるなら、受容した文明をより高い次元に引き上げたことになる。本来の近代主義とは西洋文明と同一方向を選びつつ、しかもその普遍性を正し高めていこうとする思想的営為である。もし、日本の戦前の近代化に重大な失敗があったとすれば、西洋文明の普遍性を深化させようという強い決意と反省が足りなかったからである。

第二は簡単に受容・同調したくない場合である。新たな文明との出会いに際し、なんとか自国の伝統に立ち戻ってそれを活かしたいと考える伝統主義とか（文化的）ナショナリズムと呼ばれる現象も必然的に生まれてくる。政教社の立場がこれであるが、伝統主義という意味での保守主義（国粹主義・日本主義）を成功させようとするなら満たすべき条件は二つある。

(1) まず、国粹主義はなんらかの伝統を掲げ、活かすことを主張してくるわけであるが、その内容に圧倒的な本質性がなければならぬということである。民族は多様で時に相矛盾する、あるいは一時的な、あるいは本質的に見えて表層的な無数の伝統を抱え込んでいるから、選択された伝統がもっとも本質的なもの、すなわち、他の伝統の追随を許さないほど時間的長さや社会的影響力の広がりを持った、そしていまなお、持つものである必要がある。中途半端な伝統では他の相反する伝統から自家争いで否定されかねない。有無を言わせぬ伝統でなければダメなのである。西洋のキリスト教やギリシャ・ローマ精神（人間主義・合理主義・科学精神ないしその母体）が、相互に相対立する部分を含みながらも、掛け値なく彼らの伝統と言いうるのは時間的にも社会的に圧倒的に長く深く広くそして、いまなお、現代西洋の人々の精神生活に脈々と生き続けているからである。ところが、日本の場合、伝統の有力な候補が、たとえば和歌や王朝文学（もののあはれ）・俳句や茶道や能（わびさび、または幽玄）・武士道・国体思想（ないし神道）・仏教・儒教とさまざまに挙がってきて、さしたる論証もないままにこれこそ日本の伝統だというような言い方がされるが、そのような状況こそがなにか決定的な伝統かはっきりしていないことを雄弁に物語っている。したがって、国粹主義はなにがより伝統の本質かを見極めるだけの深い歴史文明的論証性を必要とする。

(2) 次に選定された伝統に高い普遍性、もしくはその可能性が豊かに存在しなければならないということである。西洋がキリスト教やギリシャ・ローマの合理精神に高い誇りを持っているのはそれだけの普遍性・世界性が宿っているからに他ならない。政教社が誕生したのは文明開化・欧化政策華やかなりしころであるから、鎖国時代ならばともかく、自分たちの伝統が世界に向かって主張できるだけのものかどうかについて無意識のうちにもいろいろと考えさせられたはずである。日本の伝統の中に、欧米の文明を凌駕しより高次の新しい普遍性を創造しうるもの、あるいはそこまでいかなくとも、欧米の文明の欠点を補い高めるような可能性を秘めたものがあるだろうか。

この場合、我々はとかく西洋のキリスト教の神、自然法、権利、自由、ないし科学（科学は因果関係を追及する「価値中立的」な学問でただちに規範ではないが、真理性・研究の自由・万人

に開かれる平等性や公開性、あるいはそれによってもたらされる豊かな生活など、きわめて強い規範的作用を持つ）、あるいは中国の天（理）・道・仁義、インドのダルマ（法）のようなどちらかと言えば時間と空間を超えた原理を思い浮かべがちであるが（丸山真男がその典型）、必ずしも先験的ないし超時空間的原理にこだわらなくてもよい。国民の長きにわたる歴史的経験を規範に高めるといことも十分考えてみる必要がある。中国の儒者は天（理）・道・仁義を二千五百年もやかましく唱え続けたが、それはほとんど実現されず、政治的混乱と文明の停滞が延々と続いたではないか。それに対して日本の歴史の平和性・安定性は世界に誇るものがある。日本の精神史に先験的なもしくは超時空間的な原理を見出すことは難しくても、歴史経験的原理を構想することはできなくはないであろう（丸山の日本の伝統に対する評価がかなりネガティブとなってしまったのは、短所と長所の表裏一体性をうっかり失念し、歴史経験的原理の可能性を捨象しているからである。丸山政治学の最大の問題はおそらくここにある）。

実際にはこの同調と反発、近代主義と伝統主義の二つの方向性は多かれ少なかれ混在するのであるが、同調にせよ、反発にせよ、先行する文明を全面的にはなくとも、相応の部分で深め高め直し、新しい普遍性を展開するか、せめて付加することができないと成功とは言えない。この時、同調であれ、反発であれ、受容した文明のあるいは自国の伝統の普遍性を高めようとするれば、その成果・結果が一致するという事は十分ありうる。出発点は違っても正しく努力するならば、帰結は結局同じかもしれない。それが目指す普遍化・世界化の本質というものであろう。同調しても反発してもよいのであるが、普遍性に大きく寄与できるかどうかというきわめて難しい課題が後発文明を待ち受けている。政教社は自国の歴史の中から本質的でなおかつ普遍化可能な伝統を選び出すことができたであろうか。外国かぶれを叩き直せと気炎を上げたはずの政教社は日本主義を成立させることが彼らの手に余る問題であることをすぐに思い知らされることになった。

はたせるかな、政教社の同人菊池熊太郎は機関誌『日本人』が発行されてからそろそろ一年にもなるかという時に、同誌に「国粹主義の本拠如何」（第一六号、明治二一年一月一八日）、「同」（第一九号、同二二年一月三日）を書いて、我が社の主義主張については本当のところ統一見解も相互の論究もないと告白している。菊池自身は国体論者であるから、彼自身の伝統観は明白であったが、（菊池を含めて）政教社同人はかなり近代文明の洗礼を受けているから、さすがにそれで統一できる状態ではなかった。

「国粹主義ハ我社の持論なりと雖ども、未だ社説として論究したることなし、是れ一ハ重要な問題にして軽々に議了し能はざることと、一ハ社員中各自それぞれに抱懐する所の特見ありて、未だ相集りて之を一定するの好機を得ざりしに原因するものなり、」³⁾

これを読むと、我が国において伝統主義という意味での保守主義を語ることがいかに難しかったかということであらためて痛切に知らされる。文明開化・近代化をとにかくも受け入れざるを得なくなったこの時代に、それを前提としつつ日本とは、日本人とはなにかを考えることはじつは今日まで共通理解が得られていない問題なのかもしれない⁴⁾。

日本の保守主義者は国民の広範な伝統に根ざし、しかも未来に展開できるような確固たる主義主張を構築できなかったのであるが、それは彼らが日本の伝統についてよく分かっていなかったり、したがって、どのような伝統を取り出して新しい息吹を与えるべきなのかの確かな認識も自信もなく、また、彼らの思考の仕方がいちじるしく論証性・論理性を欠くことが大きな原因をなす。この点は志賀重昂⁵⁾の思想を考察する過程で指摘してきたが、この論考では対象を政教社全般に広げ、本来保守主義の観念をしっかりと固めておく必要があった草創期の同人たちの著作を中心にどのような問題があったのか、どうすればよかったのかを検証・論究してみよう。

注

- 1) 政教社の創設や『日本人』発行のいきさつについては中野目徹『政教社の研究』（平成五年、思文閣出版）、第三章。
- 2) 「井上門了博士を語る」、『思想と文学』第二巻第三冊（昭和十一年一月、東洋大学『思想と文学』発行所）、八五～六頁。この座談会についても前掲中野目書、一一五～六頁に紹介がある。
- 3) 「国粋主義の本拠如何」（第一次『日本人』第十九号、明治三二年一月三日）。
- 4) 比較的近著では一例として坂本多加雄『日本は自らの来歴を語りうるか』（平成六年、筑摩書房）を挙げてもよい。夭折した著者は保守主義の学者であったと言ってもよいと思うが、近代日本の代表的思想者の自画像をめぐる苦闘を紹介しつつ、題名が示すとおり、著者自身が一体日本の来歴とは何かについて明快な答えをまったく示せていない。とくに「あとがき」参照。日本を誇りたいという思いは伝わるが、日本の「ナショナルイズム」や「何がしかの個性」の中身は白紙のままである。
- 5) 志賀についての最近の拙稿として「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で（上）」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四三巻第四号、平成一九年三月）、「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で（下）」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四四巻第一号、同七月）、「志賀重昂における国粋主義の観念—概念の両義性と論理の混乱」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四五巻第二号、平成二〇年一〇月）、「志賀重昂の『日本風景論』—欧米的景観への憧憬」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四六巻第二号、平成二一年一〇月）、「志賀重昂の『南洋時事』—文明批判の脆弱性」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四七巻第二号、平成二三年一〇月）などがある。

一 政教社の設立趣旨

政教社はその機関誌『日本人』第一号（明治二一年四月三日）を出すに当たって、結社の設立趣旨とも、同誌の発行宣言とも言うべきものを創刊号表紙裏に掲載している。タイトルはなく、末尾に同人の一三名の氏名が添えられている。宣言書に相当するものが、表紙裏という「控えめな」所にあるのも多少変で、社の意思がまともならず、また自信もなかったからであろうか。書き出しはこうである。

「当代ノ日本ハ創業ノ日本ナリ然レバ其経営スル廻転タ錯綜湊合セリト雖モ今ヤ眼前ニ切迫スル最重最大ノ問題ハ蓋シ日本人民ノ意匠ト日本国土ニ存在スル万般ノ困外物トニ恰好スル宗教、教育、美術、政治、生産ノ制度ヲ選択シテ日本人民ガ現在未来ノ嚮背ヲ裁断スルニ

在ル哉吁嗟斯ノ千載一遇ノ時機ニ際シ白眼以テ世上ヲ冷視スルハ是レ豈ニ日本男児ノ本色ナランヤ¹⁾

日本は今重大な時期を迎えている、これを傍観しておられようかと書き始め、そこで我々は『日本人』を発行するに至ったと続けて、世間に我々の微志を汲み取ってもらいたいこと、本雑誌の発行は正当の手続きを経ていること、（広く訴えかけるという使命観から）雑誌価格は安く抑えたことなどを述べて、あっけなく終わっている。文体と「本国土ニ存在スル万般ノ囿外物」という言葉使いから見て、おそらく志賀重昂の手になると見られるが、政教社が掲げる哲学・理念を簡潔に力強く訴えるどころか、なんら中身がなく、スローガンもキーコンセプトも見当たらないしまつである。もちろん例の「国粹」という言葉も登場してこない。

『国民之友』創刊号（明治二〇年二月一五日）がその趣意宣言に「茅屋ノ中」の国民、一般国民の幸福を目的として掲げ、例の蘇峰の「嗟呼国民之友生れたり」が平民の日本、改革の日本を躍動するような文章で呼びかけ、民友社が平民主義のもとに統一されていたのとは大きな差がある。

もっとも（この発行宣言を載せた）創刊号の巻頭論文は志賀重昂の『『日本人』の上途を餞す』で、後半に国民の幸福というようなコンセプトが登場し、『国民之友』をかなり意識したように思えるが、これと肝心の保守主義がどうかかわるのかがはっきりしないし、署名入りの同論文は一応個人の作という前提であろう。

国粹主義の言葉が登場するのは第二号からであるが、それは集団というより、志賀重昂個人の使用（おそらくは「造語」）によってである。彼は『日本人』第二号（明治二一年四月一八日）に掲載した『『日本人』が懐抱する処の旨義を告白す』の冒頭で「国粹主義（旨義）」の語を用い、その内容を説明しており、やがて菊池などもこの言葉を採用している。

政教社が集団としてこの言葉を用いるのは志賀の使用から一年以上も遅れた『日本人』第二四号（明治二二年五月七日）であり、新聞紙条例に抵触して治安に妨害ありの理由でしばらくの発刊停止を受けた後ということから連名の再出発声明を載せ、あらためて政教社の主義主張を確認し世論に訴える必要があった。この声明は次号の『日本人』第二五号（同二二年五月一八日）にも再度掲載されるが、いずれも相変わらず表紙裏という「見落としそうな」位置取りである。ともかくも、この声明ではじめて社としてのコンセプトらしき「国粹」が登場する。

「余輩自ラ揣ラズ世ニ卒先シテ国粹保存ノ旨義ヲ唱道スルコト茲ニ一歳春陽掃り来リテ大ニ感悟スル所アリ今ヨリ以往肅々タル鞭策ヲ振ヒ奮起勇進シテ国粹顕彰ノ旨義ヲ取り帝国ノ元氣ノ振作シ帝国ノ秀美ヲ開発シ兼子テ帝国ヲ萎蕪スベキ政治、宗教、経済、社交、文学、技芸等諸般ノ弊風ヲ排除セント欲ス²⁾

以下、云々となっているが、やはりほとんど内容がない。我々の主義は「国粹保存」・「国粹顕彰」（「国粹保存」で始まったが、「国粹顕彰」に変えた）というだけで、スローガンないし理念はやっと登場したが、それも志賀の言葉の借用である。そして、その理念の中身はなんら伝わってこない。詳細な説明は省いてよいとしても、主義の基本的内容がこの時期になっても鮮明でないのは問題である。

この点は菊池熊太郎が告白しているだけでなく、同人たちも気にかかっていたであろう。集団として国粹主義を何とか説明しようとしたように見える論説が二つほどある。再出発宣言の翌号に載った「余輩国粹主義を唱道する豈偶然ならんや」(『日本人』第二号, 明治二二年五月一日)と、国会の召集という新たな段階に入った日本を意識した「『日本人』の革新」(同第五九号, 同二三年一二月二五日)がそれである。両者とも巻頭を飾り、いずれも無署名であるが、前者は三宅雪嶺の作と言われ(後述の注参照)、後者も内容から見て彼の作と判断してよいと思う。後者も雪嶺作と思われるのは、国家主義(おそらく政府中心主義という意味での国家主義)を排し、普遍主義・理想主義を掲げた点で、彼の『真善美日本人』(明治二四年)の「序」およびとくに「凡例」の内容に酷似しているからである。両者とも無署名であり、とりわけ後者は「『日本人』は啓発し、本日(を以て第三期)に入る。聴け。」³⁾という書き出しから見て、当然集団の主義主張をある程度代表して説明したように見える。前者の「余輩国粹主義を唱道する豈偶然ならんや」については三宅雪嶺のところで触れるが、ようするに国粹とは民族の固有性であるという点を強調しているものの、それは当たり前の話で、では何が日本の独自性・固有性であるかという肝心の中身については何も語っていない。

そして、それから半年以上もたった後者「『日本人』の革新」(『日本人』第五九号, 明治二三年五月二五日)でもその点は一向に明らかになっていない。ただ、この論文は国粹主義の中身を明確にできなかったものの、国粹主義の向かうべき方向を鮮明に打ち出していて注目に値する。

「但し、余輩の旨義とする所は、依然として国粹顕彰に在り。国粹顕彰は字内の通義なり。国粹を顕彰して、一国の福祉を謀れば、兼ねて世界の福祉を謀るに足らん。凡そ進歩は単純より複雑に推移する所の処に存在して、幸福の増殖も単純の幸福を変じて複雑の幸福と為らしむるを称するに過ぎず。一国の特質を發揮するは、世界に新原素を供給して、事を複雑にするに同じ。(中略)日本の特性なる者を發揚し、工業に特性を顕はし、貿易に特性を顕はし、學術の方法に特性を顕はし、遊芸の趣向に特性を顕はし、他に多く類を見ざるが如き世態の体面を作為するは、即ち新奇の物件を輸送し、大に世界の利益を増進するに均しからずや。国粹顕彰は人の大義として須臾も忘るべからざる者ならんか。(中略)余輩超然として国家主義と個人主義との上に立つ。呼て固陋頑冥とする者は、其為す所に任す。称して過激暴戾とする者は、亦た其為す所に任す。余輩を知る者は、其れ唯た「日本人」か。」⁴⁾

第一議会の召集日に合わせて、国粹主義をあらためて宣言したこの文章には、これまでとは違って珍しく方向性のようなものが出ている。国粹主義は国家主義でも個人主義でもなく、一国の特性を世界に提供することによって進歩を促すところにあるという部分である。国家と世界、民族と普遍を結び付けようとする強い意欲に、普遍主義への志向がよく出ていてこの点は一応高く評価してよい。これが雪嶺作と思われるのは、すでに述べたように彼の『真善美日本人』(明治二四年)の「序」と、とくに「凡例」の内容に酷似しているからである。いずれにしても同論文は国粹主義が理想主義であることをめずらしく正面から打ち出していて、こういう主張を持つ論説は『日本人』にはほかに見当たらない。

しかし、この主張はいろいろと問題を含む。

まず第一に、日本の特性、特性と連呼しながらその中身がなんなのかをまったく答えてくれない。これが同論説の決定的弱点である。

第二に特性がわからなければ普遍への結び付け方も、結び付くかどうかさえもわからなくなる。わからないのに両者を結び付けようとするのはまことに安直でかつ乱暴強引である。元来民族の特質は多様であるからすべてがただちに普遍に結び付くわけではない。当然、普遍性とおおいに反する部分も必ず含まれている。それが伝統というものの本質であろう。もしそれを普遍的価値につなげようとする、民族の伝統とはなんなのか、伝統のはたしてどの部分を掬い上げていくのか、その構造はどのようなものであり、いかなる特徴と短所があるか、またそれを普遍に結びつける時にどのような注意が必要かという考察などが不可欠である。

第三に第一、第二のような手続きを欠いたまま安易乱暴に民族と普遍、日本と世界を結び付けてしまうと、日本のすべての行為が普遍の名によって美化される。朝鮮や満洲への支配侵略も新しき東亜の建設・世界の新秩序というような名称で正当化される恐れがある。普遍主義が超国家主義に墮してしまう。現に日本はそれをやったではないか。

そうじて同論文には日本を誇りたい、世界の文明に寄与したいという思いの深さは出ているが、伝統の内容が不明で、そのため論理が強引で飛躍がある。集団として理論を整理し深い伝統理解や評価に到達できなかったことが影を落としているのである。

これほど伝統の中身の設定に苦しみ、そして、菊池のようにこの点に関し集団の意思統一がまったくできていないと告白するならば、どうしてバラバラなのかそれ自体を正面から論究して見ればよかったのである。日本人は自らの伝統についてなんとなくわかっているような気がしていながら、いざとなると内容をしっかりと詰められない、意見の一致を見ないところにこの問題の本当のむずかしさがある。武士道や国体思想を持ち出してもよいのであるが、それが、本当に長く広い国民の伝統と言えるのか、また、それが政教社（もしくは雪嶺）が希求した普遍性という点で世界に誇れるものなのか、こういうことをよく議論し、研究してみるべきであった。ところがそういう議論の深まりがない。政教社は言論集団であって、純粋の学術団体ではなかったと言ってしまうばそれまでであるが、高い学究性・論証性がないと国粹主義を思想として成功させることはできないのである。

そこに政教社に限らず、日本の保守主義の抱える根源的な欠陥がある。伝統を正しく認識し、それを近代の中に生かしていくこと、またそれにふさわしい伝統をどう探し出すのかということはそれほど困難な課題であった。これをさらに同人に即して見てみよう

注

- 1) 第一次『日本人』第一号，明治二一年四月三日。
- 2) 同第二四号，同二二年五月七日，同第二五号，同二二年五月一八日。
- 3) 同第五九号，同二三年一月二五日。
- 4) 同。

二 今外三郎

政教社の中には伝統について考え方が定まらないどころか、関心がなかったように見える者もいた。今（こん）外三郎がそうである。今は札幌農学校に学んだ志賀の一期後輩であり、同じく長野県中学校で教え（志賀は長野本校、今は上田支校に勤め、時期的には志賀の免職と入れ違う形になったが）、東京英語学校でも一緒だった。地理関係の著作をいくつか残しているが、明治二五年三月に夭折した¹⁾。

今は創刊当初の『日本人』に「日本殖産策」（『日本人』第一号、明治二一年四月三日）、「日本の実力（其一）」（同第四号、同二一年五月一八日）、「日本の実力（結論）」（同第七号、同二一年七月三日）、「大農論」（同第一三三号、同二一年一〇月三日）、「日本産業の前途」（同第一七号、同二一年一二月三日）、「産業社会のために」（同第三二号、同二二年九月三日）などを載せている。

「日本殖産策」は産業の育成を論じて政府の保護干渉政策に反対し、「日本の実力」では軍備の増強よりも実業の育成を求め、「大農法」では折からの不況によって生じた土地の兼併を非難して小自作農業を支持し、「日本産業の前途」では貿易立国、とくに中国とアメリカの仲介貿易を説き、今度は一転して政府の貿易保護を求めている。「産業社会のために」は大隈外相の条約改正案に反対したものであるが、とくにその内地雑居を批判し、「今回の条約改正案なるものハ、単に農工商の状態よりするも、既已に将来に害毒を流さんとするものなり。」²⁾と、とくに産業の育成という観点から条約改正案を批判した。この当時の論者が自由貿易か保護貿易かで逡巡するのは当然で、志賀も『南洋時事』の中で、自分はしいて保護貿易を唱える者ではないと断りながら、たとえばハワイの廉価な砂糖が無税で輸入されると多くの国民の生活には便宜だが、琉球や薩摩の製糖業はどうなるのかという懸念がある、発展途上の産業はなるべく保護すべきだと述べている。「予輩固ヨリ強ヒテ保護貿易説ヲ唱道スルモノニ非ラズト雖モ、唯今日ノ状況ニテハ我国内ニテ漸次発達進暢セントスル民間ノ事業ハ成ル可クハ保護幫助センコトヲ希望スルモノアリ。」³⁾

これらは要する殖産興業論で、この内容では近代主義者となら変わりがない。殖産興業に関心を持つことが悪いと言っているのではない。伝統主義者としてこの時代に近代産業の育成に強い関心を持つのは当然であり、いな、むしろ伝統の立場から近代化をどう受容するかというのは保守主義者が正面から立ち向かうべきテーマなのである。ところが、殖産興業と日本の伝統がどうかかわるのかという視点が決定的に欠落しているためにたんなる近代主義者との区別ができなくなっている。

今の考え方は産業立国を目指すという点で志賀の本音に近い。また、「予輩は今日吾国に於て年々歳々軍費を徴収し、海陸軍を拡張するハ果して何等の目的に因るかを判知する能ハズ、只此軍備たる国民一般の疲弊を来せる大原因の中に数へらるゝの一事あるのみ、是れ豈順序其当を得たる者と云ふを得べきか、民力蓄積を先にするハ正当の順序に非ずや、」（『日本の実力（其一）』）⁴⁾と富国を強兵に優先させる平和主義者である点でも志賀に似ている。今は札幌農学校で一年志賀の後輩だから、いくらか影響を受けたのであろうか。ただし、志賀は本音の部分では近代主義者

ながら、政教社の中では伝統の本質をもっともよく理解していた。今はそういう部分すらないから、志賀以上に近代主義者ということになる。もし、そうだとすると、思想レベルでは政教社に加わるべきではなかった人になる。

注

- 1) 同人の略歴については、中野目徹『政教社の研究』（平成五年、思文閣出版）第三章を参照。
- 2) 「産業社会のために」（第一次『日本人』第三号、明治二二年九月三日）。
- 3) 『南洋時事（初版）』（明治二〇年）、一七四頁。
- 4) 「日本の実力（其一）」（第一次『日本人』第四号、明治二一年五月一八日）。

三 加賀秀一

加賀秀一は帝国大学文科大学選科を卒業し、哲学館、学習院などで教鞭をとった。彼は「日本人心概論（緒言）」（『日本人』第二号、明治二一年四月一八日）を寄せて「是を以て凡そ一国の人心を概論するに方てハ寧ろ個々特別の性質に拘らずして各人通有の性質を論じ、且中等社会の者に就て論拠を立るを以て主要とす、因て本論に於てハ日本中等社会の通有性質を論究し、以て現今将来の国勢を推定するの資料に供せんとす、¹⁾と述べて、日本人とはなにか、特に中流社会の気質を論じ、国家の将来を占う材料にしようとした。これなどは一種の伝統論になりそうな内容である。しかし、彼は続いて「日本人心概論（其一）」（同第五号、同二一年六月三日）を載せただけでこの試みを放棄してしまった。

ところが、その一方で彼はこの年の五月に英文で18頁ほどの小冊子であるが、『現代日本人の心理的研究』（*A Psychological Study of the Modern Japanese*, 1888）を書いて出版していた。これは表紙に記したところによると、もともとは*The Student*という雑誌に掲載された論説の書籍化である。*The Student*誌はタイトルのように学生向けの英語月刊誌で、明治一八（1885）年創刊。ただ、欠号が多く、『現代日本人の心理的研究』が載った巻号は不明。

本書の中で彼は日本人は「意志（will）」や「情熱（passion）」や「意欲（desire）」が弱いことを強調していて、これはかなりの的確である。加賀はこの弱さの原因を仏教の涅槃の思想と中国の道德思想（儒教）の影響と考えているようである²⁾。一方、日本人の中上流階級は時に反社会的となる武士の「敵愾心や負けじ魂や意地（the feelings of personal rivalry, jealousy, and malevolence）」のために中国人や朝鮮人よりエネルギッシュで、現今の西洋人との接触により、その精神は栄光や名誉よりも金銭目的や生存のための野心へと変貌したと述べている³⁾。もっとも、例のグリフィスの『ミカドの帝国』（*The Mikado's Empire*, 1876）が日本人は儒教の影響で正直で親切、信頼でき、礼儀正しいと書いてあることを引用し、今でもかなりそうであるとも書いている⁴⁾。

加賀の本書は短いものであるが、いちおうまとまっております、「日本人心概論（緒言）」・「同（其

一)」とは違って、結論が明確に出ている。彼が日本人を一般に意志や情熱に欠けると評価しているのは的確であるが、これを仏教や儒教の影響に帰しているのはどうであろうか。インド人はあくまでも涅槃を希求する点で日本人より意志や情熱が強いはずだし、中国人は執念や気象が日本人よりずっと激しいではないか。また、日本人が正直で親切、礼儀正しいというのも妥当であろうが、それが儒教の影響というのは正しいであろうか。儒教の本場中国の風俗・モラルが実のところ日本に劣ることはすでに江戸期の儒学者や国学者も指摘しているところである。そうすると日本人の善良さの原因は別のところに求めなくてはならない。

加賀の日本人の描き方はそれなりに正しいところがあるが、日本をインドや中国とひとまとめにして説明しようとする、どうしても儒教や仏教の影響を強調する形になり、日本の独自の歴史文明の特徴が鮮明には浮かび上がってこない。さらに、加賀は西洋に追いつこうという姿勢で日本人を見ているため、その意志や情熱の弱さを懸念するのはもっともだとしても、一方でその反面にある平和性や秩序性のような本質の良さが十分には評価されずに終わってしまっている。日本文明の独自の由来とその固有の美点をはっきりさせるのが国粹主義ではなかったか。そういう歴史文明論的な追究の深さも欠けている。そして、このような学問的深さを追いかけると、とうてい一八頁程度の小冊子では済まず、必然的にもっと重厚な著書になるであろう。多くの思想的著作を時系列的に丹念に検討し、歴史の流れをもっと詳しく考察しないと伝統の本質は分からないはずである。加賀に限らず、政教社にはそうした学問的な著作を書ける人がいなかった。大部な日本精神史が生まれなかったのは、日本の伝統についてなんとなくわかっているような思い込みがあり、また、伝統の歴史的变化や発展を考慮に入れていないからである。

こういう疑問はあるものの、本書はそれなりにまとまっており、日本人の心理的本質の捉え方自体は肯定できる。しかし、なぜ、加賀はこれを *The Student* 誌には載せ、『日本人』には載せなかったのであろうか。この事情は分からないが、日本人を否定的に描いた点に気が咎めたのではないか。日本人の良さを再認識するのが『日本人』の趣旨であるから、それにそぐわない気がして続編を書かなかったのであろうか。そうだとすれば、彼は日本に誇りを持ちたいと思いがながら、どう誇ってよいのか自信が持てなかったのである。

その後、彼は『日本人』に「宗教及道德の成行を如何せん」（『日本人』第二六号、明治二二年六月三日）を寄せている。その趣旨は人心のきわめてあわただしい文明開化の世にあって、憲法の明文外に宗教道德の標準を立てなければならないというもののだが、加賀は儒教も通用しなくなっているが、さりとて欧米流も日本人に適していないと述べて、「本論に於て、吾輩ハ唯世間に向て、根本道德確立の注意を攪起するに過ぎざれば、若し夫れ道德の標準及其感化の方法如何に至てハ、他日を期して弁することあるべきのみ。」⁹⁾で結局どうしてよいのか途方に暮れてしまった。

ここには欧化と伝統に引き裂かれた政教社同人の迷いや苦悩がよく出ている。加賀は日本の独自性にこだわるという意味で伝統的ナショナリストでありたいと欲しながら、伝統に自信が持てず、日本文明の独自性とその由来もよく理解できていなかった。これらの作業が明確にできないと欧化にどう立ち向かうべきかも結局わからないのである。加賀が日本人は意志や情熱が弱いと

捉えたのは的確であるが、その反面としての日本人のおだやかさや平和性のような優れた美質を見落としているし、風俗が善良であると考えているのも正しいが、これを儒教の影響で説明するような明らかな誤解もある。加賀の議論には見るべきものがあるが、そうじて伝統の背景にある地理歴史文化への理解が不十分で、伝統の内容にも自信が持てなかったであろう。

注

- 1) 「日本人心概論（緒言）」（第一次『日本人』第二号，明治二一年四月一八日）。
- 2) *A Psychological Study of the Modern Japanese*, pp. 16-8.
- 3) *Ibid.*, pp. 10-1.
- 4) *Ibid.*, pp. 11-2.
- 5) 「宗教及道德の成行を如何せん」（第一次『日本人』第二六号，明治二二年六月三日）

四 三宅雪嶺

この点は三宅雪嶺¹⁾によく似ている。日本の古代への関心，伝統に誇りを持ちたいという思いの強さで雪嶺は加賀と同様かそれ以上にナショナリストではあるが，しかし，伝統の本質がなんであるのかということになると，加賀以上にわかっていない。それは『日本人』（第二五号，明治二二年五月一八日）に載せた雪嶺の作と言う²⁾「余輩国粹主義を唱道する豈偶然ならんや」によく現れている。これは国粹主義を正面から論じようとしており，日本の伝統の本質についてどう答えるのかおおいに期待を抱かせるが，内容的にはまったくの肩すかしに終わっている。

彼はこの中で「国粹とは 無形的の元気なり 一国の特有なり 他国に於て模擬すること能はざるものなり」³⁾と書いているが，この国粹主義の定義は志賀重昂や菊池熊太郎がすでに主張したことを一年遅れてなぞっただけで，とくに表現は菊池の「国粹主義の本拠如何」（『日本人』第一六号，明治二二年一月一八日）からそっくり借りており，民族の固有性が国粹であるというのは同義反復に過ぎず，なにも言ったことにはならない。また，この定義にそって，いったいなにが日本の固有のものなのか，特別なものなのかについてまったく答えていない。

「仮令歐米の風俗を採用するも，仮令旧来の習慣を打破するも，日本在来の精神は之を保存せざるべからず，之を顕彰せざるべからず，之を助長せざるべからず，」⁴⁾

「泰西の利機は之を採用するも，泰西の知識は之を利用するも，各自「日本人」たるの精神ハ之を喪亡せざるべしとすること，是なり，」⁵⁾

まことに中身のない発言である。陳腐な採長補短論で，西洋文明一辺倒でなく日本精神を生かせと力説しているが，それがどういうものなのか手がかりさえ得られないではないか。志賀ならば，おだやかな風土の美や国民生活，菊池なら国体，加賀なら意志や情熱は弱い風俗は善良であるともう少し明瞭な説明を与えただろう。

国体を含めた日本の伝統に関心がある雪嶺が日本人論を展開するのは当然の成り行きだが，日

本人の本質を的確に捉えられず、——また、そのせいもあって——強い西洋コンプレックスに悩まされているために、追いつき追い越せ型の近代ナショナリストの発想に墮するか、無理に日本主義者になろうとすれば国体論あたりに帰着くしか手があるまい（実際、後年の雪嶺はそうである）。代表作『真善美日本人』（明治二四年）および続編たる『偽悪醜日本人』（同年）は日本人の特性を普遍的に高めようとする理想主義的意気込みと、逆になんとか西洋に追い付こうとする追従型・コンプレックスの傾向が混在している。

たとえば、『真善美日本人』の「序」や「凡例」、そして第一章に相当する「日本人の本質」には次のようなかなり高揚した言葉が並ぶ。

既述のように、この論調は雪嶺作とほぼ断じてよい先行の「『日本人』の革新」（『日本人』第五九号、明治二三年一月二五日）とよく似ていて、彼の普遍主義・理想主義の傾向が強くてくる。

「日本人は有為の種族なり、八荒（世界）のために偉大の任務を負えり。」⁶⁾

「自国のために力を尽くすは世界のために力を尽くすなり。民種の特徴を發揚するは人類の化育を裨補するなり。護国と博愛となんぞ撞着することあらん。」⁷⁾

「日本人が大いにその特能を伸べて、白人の欠陥を補い、真極まり、善極まり、美極まる円満幸福の世界に進むべき一大任務を負担せるや疑うべからざるなり。」⁸⁾

「『日本人』の革新」と同様、普遍主義への志向が強いこと、日本には高い世界的使命があることを訴えて、日本の伝統を普遍に結び付けようとしていることは評価できる。そして、その理想主義が平和主義であるところに西欧文明に対する批判もある程度出ていると言ってよい。

しかし、問題は伝統が安直に普遍主義に結び付くかどうかである。伝統がすべてそうなるとは限らないはずであるから、伝統の中身をよく吟味し、普遍化可能なものを特定しなければならない。ところが、この作業が全く欠落しているから、なぜ、どうして、伝統が理想主義・平和主義に上げられるのかがまったく伝わってこない。雪嶺は国土の美ということを述べていて（志賀はすでに『国民之友』や『日本人』の中でこの点を強調しているから、その影響があろう）、それが平和主義や理想主義と関係するようであるが、地理環境が国民のどういう精神性の形成に寄与したのか、その精神性がどうして円満な世界を作ることと結びつくのかが明らかでない。要するに肝心の国民の特性がはっきりしないのである。これは雪嶺が民族性を十分に理解できず、また、自信も持てなかったということ示しているものに他ならない。

したがって、民族の特性を伸ばして、世界の平和に貢献するのだと言いながら、一転して、追いつき方のコンプレックスが噴出してもいる。たとえば、同書第二章にあたる「日本人の能力」では我々の知力はアリアン人種に劣らないということがしきりに強調されている。日本人は体格では欧米人に劣るが、集団戦になれば引けを取らないとか、秀吉や家康や西郷のような英傑、忠敬・馬琴・式部のような立派な学者文人がいたとか、はてはやや脱線して、中国やモンゴルの英雄の事業は西洋のそれに勝るとも劣らない、だいいち、アリア系は四億、モンゴル系は六億だから人材も豊富なはずで十分欧米に対抗できると。雪嶺は精一杯、日本人・アジア人の可能性を謳いあげてはいるが、欧米人に劣るとか劣らないとかばかりを気にすること自体がすでに近代文

明という相手の土俵で相撲を取ることであり、国粹主義者としては情けない。

また、先述したように、雪嶺は日本の世界に対する使命を力説し、伝統を普遍に結び付けようという点で理想主義者なのであるが、伝統の中には普遍化できないものも当然含まれていから、何を選び出すかという作業が重要なのであるが、できないままに伝統の世界化しようとする、今度は普遍主義が一転して超国家主義になってしまう。たとえば、周囲に流され時流に乗って、伝統の中身を国体精神で埋めてしまうと、国体を伸長することは世界に貢献する道であるということになるが、これは理想主義転じて超国家主義である。

雪嶺は日本の伝統に関心があり、日本の固有性に誇りをもちたいと思っていた。その思いの強さでは志賀よりもナショナルリストの資格がある。志賀は日本の伝統にはさして関心がない。むしろ、嫌っていたと言ったほうが真相に近いだろう。ただ、ナショナルリストでない志賀のほうが皮肉なことに日本の伝統がそれなりに見えていた。一方、雪嶺は——あるいは雪嶺もと言うべきであろうか——、なにが日本の誇るべき伝統なのか、固有性なのかがよく分かっていない。日本人の本質や国粹主義を正面から論ずべき著作でその定義すらできなかったではないか。そうすると、結局は保守主義者の通例で国体思想や皇国意識でこの空白を埋めるしかないことになる。もちろん当初、雪嶺は自己をいわゆる国体論者とは意識的に区別していた。

しかし、日本人の本質が分からないままの空白で残されてしまうと、結局ここになにかを持ってこなければならない。雪嶺は文明開化の当時は神国意識をかなり意識して抑えていたのであるが、日清・日露の戦争に勝利を得て、日本が大陸に進出するようになると抑制が利かなくなってくる。明治の初期とは違って、この頃になってくると、国体論を前に出してもまったくの保守反動主義者とも思われまいだろうという安心感が手伝ったと考えられる。これが文明開化華やかなりし頃であると、うっかり皇国史観のようなものを唱えて攘夷主義者の烙印を押されると、相手にされないという恐れがあった。しかし、近代化が当たり前のことになれば、今度はそれを前提として安心して皇国意識を持ち出せるのである。『想痕』（大正四年）所収の「神武天皇とエグベルト王」（『日本及日本人』第五二七号、明治四三年二月）、日韓併合を祝福した「拡大せる日本帝国の今後」（同第五四一号、同四三年九月）、「北へ南へ西へ東へ」（同第五四六号、同四三年一月）、「新年を迎ふる日出国及び東大陸」（同第五七三号、同四五年一月）、「大徳大業を憶ふ」（同第五八八号、大正元年八月——ただこれを収録した『想痕』では年代が記されていない——）、「明治大帝と威籐一世との対比」（同第五八九号、同元年九月——これも『想痕』では年代の記載なし——）、『小紙庫』（大正七年）所収の「第一代天皇二千五百年祭」（『日本及日本人』第六五二号、大正四年四月）などがそれであり、日韓併合などの領土拡大を礼賛しつつ、そこに国体の神話を重ね合わせている。

これは伝統の中身をよく理解せず、普遍化可能な伝統をすくいあげようという努力を怠り、安直に伝統と世界を結合させてきたツケである。強引に伝統と世界を結合させようすると、理想主義・普遍主義転じて超国家主義に行き着くしかない。

日本にはこのタイプの伝統主義者がまことに多い。たとえば、近代主義者として出発しながらやがて皇国主義者となった徳富蘇峰を挙げてもよい。あるいは京都学派を引き合いに出してもよ

い。というよりも、蘇峰や京都学派に限らず、日本の知識人たちを含めて国民一般がやはり伝統についての正しい認識と評価を持ちあわせていなかったのである。ある程度近代的学問の洗礼を受けた知識人たちは、いきなり皇国史観を持ち出すほど愚かではなかったのであるが、何が日本の伝統で、どう普遍化可能かについて理解も自信も持ち合わせていなかった。しかし、そうすると、そこを何かで埋める必要がある、また状況や外側からの圧力で埋めなければならなくなる。その時、伝統に対して的確な答えを持ち合わせていなかったことでいわば高い代償を払わされたのである。とくに昭和期に入って、インテリも国民も国体論やアジア主義のようなものに乗せられ、しぶしぶあるいは進んで軍国主義を受け入れていったのは現象的には伝統回帰のように見えながら、じつのところ伝統に対する無理解が原因であると言ってもよい。

注

- 1) これは無署名論文であるが、『三宅雪嶺集（現代日本文学全集 第五篇）』（昭和六年、改造社）巻末の八太徳三郎編「年譜」、また、柳田泉『哲人 三宅雪嶺先生』（昭和三一年、実業之世界社）第二章の（二）に雪嶺作として紹介し、鹿野政直編『陸羯南 三宅雪嶺（日本の名著 37）』（昭和四六年、中央公論社）、本山幸彦編『三宅雪嶺集（近代日本思想体系 5）』（昭和五〇年、筑摩書房）も雪嶺のものとして収録している。本文に記したように、国粹について志賀ならば国土の美や優美な感性を、菊池なら皇室を挙げると考えられるが、内容を明確に確定できないところを見ると、この二人ではなく、雪嶺作と考えるのがやはり自然であろう。
- 2) 雪嶺については、拙稿「三宅雪嶺の国粹主義—志賀重昂と対比して」、『名古屋学院大学研究年報 17』（平成一六年一二月）参照。
- 3) 「余輩国粹主義を唱道する豈偶然ならんや」（『日本人』第二五号、明治二二年五月一八日）。
- 4) 同。
- 5) 同。
- 6) 『真善美日本人』（明治二四年）、柳田泉編『三宅雪嶺集（明治文学全集 33）』（平成元年、筑摩書房）、二〇〇頁。
- 7) 同、二〇〇～一頁。
- 8) 同、二〇四頁。